

WPI NewsLetter No. 67

1978年8月10日 戦争抵抗者インター日本部 大阪府阿倍野区旭町2-12-2

日高ヒラ入れ。昼宿記

① 個別のヒラ入れ

7月15日、日高原発の現地ユキは、つとめなどの都合で、朝、風、夕出発の三班にわかれた。私は先発の朝組。

午後2時現地日高町阿尾到着。バス停をおりると、すぐ港で、道路ぞいの防波堤に、舟の帆先がずらりと見える。カンカン照りの道は、人、子一人歩いてない。

朝組のその日の予定は、夕方までに阿尾地区一九五戸一軒一軒ヒラ入れすること。賛成派の家も反対派の家も全部訪ねて、夜のスライド上映と交流会へのよびかけをする。

Mさんと組になって、まず一軒目に入る。50すぎのおばさん。

「あー、こんど事前調査の受入れが漁協で決まされたというところをきいて、心配になってやってきたんです。ここに原発できたら、大阪に住んでいても、こりゃえらいこっちゃ他人事やない、と思ひまして」「ああ、原発ね。みんないろうな」と見学にいつてはりますよ。そんなに危いもん



やないらしいよ。ここにも南配さんが買物にきてくれはります。私ら、ようわかりませんけどねえ。ずっとまあ回ってみなさい。反対の人にもいますよ。」

このおばさん、賛成派かとおもうと反対のよう云い方もする。

Mさんと交たいにいろしやべっているうちに、緊張していた気分がほぐれてきて、とまかく、ごつくはらんにしゃべればよいのだということがわかってきた。

ーBさんのところで

「うちは反対や、ずっと反対や、あんたらこの暑中を、遠いところからくるうさんやけど、今、運動は下火だね。愛郷同志会という反対派のあつまりもあるんやけど、ここんとこずっと集りもしてへんしな。みんな誰かがやってくれたらええと思ってるんや。」

そこへだんなさんが顔を出してきて、

「このヒラに書いてあるようなことはようわかってるがな。反対、反対ゆうても、具体的にどういう方法で反対するのか、それをおしえてくれ」

それでいっぺんにしごともどろ。「こうすればかならずうまくいくという具合にははっきり云えませんが、反対する気さえ強ければ、方法はあるんじゃないかと思っています。今夜の交流会でそのことを話し合いたいです。夜せひ来て下さい」

しかし、このBさんがいっている愛郷同志会というのが、むしろブレイキになっているという気がするのだが……

コンクリートづくりの大きな白い家―玄關で

「原発に反対で、あんたら頭おかしいんじゃないか。電気がなくなったらどうするんや、私ら電氣要るもん

な。原発が危険／＼というけど、大阪の近くにも危険なもんはいっぱいあるやろ。原発に限らず、人がでたり、死人がでたりするのは、新南にでえへんだけで、どこの工場でもつきもんや。心配ばかりしてたら何もでけへん。あんたら井産党やろ、あんたらまたいねんと話しようない、さあ帰れ」

体をふるわせ、口びるをゆがめて、おばさんと若奥さんの二人で、すごいケンマウ。とりつくしまもない。

「まあ、ちょっとだけ私の話をきいて下さい。原発事故が、ふつうの工場のケガや死ぬのとちがうところは、その人だけにどまらないうことですよ。そのまわりの人も放射線をうつけるわけですし、その子供や

孫にまで及ぶわけです。見学に行かしたとしても、それとこを見せへんのはあたりまえで、私らはいるんな裏話をきいています。こんな話知ってますか……」
「そんなめんどうな話聞きたくない」というのを、それでも10分以上ねばったかな。「またきます。まあ一度交流会にもきてみて下さい」といって家を出た。

一軒平均10分ぐらいで夕方6時ごろまで、全部でまわったところは20軒。反対12、賛成4、不明4というところだ。

賛成派のところはどこも同じようなしやべり方をするのを見ると、輿電の宣伝が、かなり強くいきていっている。

しかし、ともあれ、一歩動き出してぶつかってみると、人さまざまで、その微妙さや感じは、やはり来てみなければわからないことだった。

② 夜の女流風

スライドをはじめる夜の8時ごろになると、神社の境内にある公民館に、ぞくぞく人が集まってくる。

「ガラ入れで頑みしりになったおばさんたちがこちを見て親しそうに笑いをうかべる。

今夜は男衆はほとんどいない。夕方からみんな漁に出かけたのだ。昼間やってくれたらなあど、港で出漁を待つおじさんたちが残念そうに云っていた。

スライドは「原発で働く人の放射線被曝と安全の太
宣伝のかけで続出する被曝者と」伊方訴訟とは？らの
二本。あの方方は瀬戸内通信の学生グループの仲間が
苦心して作ったものだ。

スライドのあと、まず私たちのうちから五人だけが
自己紹介をかねて、なんで日高に来たのかというよう
なことを一人五分位ずつ、できるだけだけ調子で
しゃべる。いつもよくしゃべっている人ではなくて、
今日はじめてという人にしゃべってもらおう。それで空
気をやわらかくほぐそうという意図。それでふんいき
はかなりくだけたものになったが、さて次の番、地元
現地の人の発言となった。でも誰も発言しそうもな
い。Bさんが、「この女の人は、集りなどの人前では
なかなかしゃべりませんよ」と云っていたとおりだ。
そんなときには、と前もって私たち大阪からきたも
のは地元の人の間にまじってバラバラに座っていた。
それでそれぞれが自分のまわりの人数人と雑談的な
話し合えることにした。まあ一つの部屋につめこん
だ分散会みたいなものである。

もちろん司会などなし。すると、なんとまあ、一か
もたゝぬうちに会場はウワーンというひびきで蜂の
巣をついたよう。てんでにしゃべり出したのだ。

「むかしは、ここらへんでもデモをしたり集会した
りして、えらい反対が強かったんですよ。でも今は、
えらい人はいつのまにか賛成にかわってしまて、上の

方はよう変わるんですわ、かといって私たちが積極的
にやってみようということもようせんし……」

「この村は、親せき関係が強いから、ややこしい
んですよ。反対するにも人の頼みいみいせならん。
心では反対していても、人の前ではっきり自分は反
対やという人はいないですよ」

「この人は、みんな人まかせやからあかん……」
次から次にとびかうまわりの話し声で、相手の声が
聞こえないくらい。

やぶかにさされながら、予定の時間をはるかにま
わって、とうとうに時半すぎまで一気にもりあがっ
て、熱っぽく交流会が続いた。

★ ★ ★

会が終わって二時ちかく、その夜は方抗で民宿をや
っているHさんのところに泊ることになっていて、
阿尾から方抗まで漁船で運んでもらった。

真黒な海に、月のあかりがトロトロゆれて、なん

非暴力訓練とは何か

10月6日
新

- 容
- ・トレニングレポートへ宮崎大坂府の吉見水見外
 - ・非暴力直接行動のための訓練技術（近志）
 - ・ミーティングのやり方④⑤（岡本）
 - ・街頭デモのやり方④⑤（岡本）
 - ・その他資料いろいろ。A5版厚紙、送付料500円

とロマンチックなこと。うっとうししていると、Hさんが運転を止めて、「あのずっとおこう、ほらいま赤いランプがとまった炉台のところから、ここまですりめたてると云ってるんです」とおしえてくれた。

おそろしいことだと思ふ。自然をそんなにまでも破壊して、人間だけがびじ生きのびられるわけではない。さて、着いておそい夕食。みんな腹ペコだ。一行25名へうち女11名。すこしのビールにすっかりいい気分になって、話がはずむ。

とにかく交流会は、部落の人に喜んでもらえたんじゃないかということ。みんなもうれしくなっていたのだ。とくにこの集会の肝入り役Hさんに喜んでもらったのが何よりで、またかいがあったと思った。Hさんはまだ若い。ここでは一番積極的に反対している人なのだ。だが、Hさんと歩調を合せていっしょにやる人がなかなかいない。

その夜、ようやく寝たのは二時〜三時だったろうか。その夜はみんな満足で幸福だった。だが……

★ ★ ★

③ 16日は、産湯へ6戸、比井へ15戸、津久野(今戸)小浦(63戸)、方抗(12戸)、小抗(12戸)、柏(46戸)大井(1戸)の部落入り。こんどは総勢25人を2人組にわけて、それぞれの部落に。手には、「原发力は認めんだ」「みんな力を合せて原発をおいだそう」と書いた赤や青の風船をもってー。

私は今日はHさんとの組
9戸だけの津久野部落。この部落は反対が多いと聞いてきた。

まず一軒。みるからにたくましそうな、30すぎくらいの漁師の人。

「オレは反対さ。」「でもみんな聞かれたら反対というだけで、自分から積極的になんかしよういふもんはおらんよ。全員に無記名で○か×をさせてくれたらええんや。」

256の若奥さんが出てきた

「うちらも反対やけど。でもようわからんもんね。どっちでもええ反対と、みんなちやうか。やるゆうとるから、できるんちやうか。」

そこへ主人が帰ってきて

「今日の日はなんぼや。なんぼもらってるんや。おまえら共産党やる。」

★ ★ ★

ほとんどの家が反対だった。でもそれきりだった。しゃべったことは全部すいとり紙のようにすいとられてしまった。それきりだった。

つかれて、Hさんと海辺の堤防にこしかけてラムネをのんだ。

「こりゃあ、原発はたちまうなあ」と私がいうと、

「そんなこと、わしやさせへで、こんなとこに建てられたらイヤやしな。わしや大阪からでもすわりこみにくる」とHさんがいうのである。

私はびっくりしてHさんの顔をみなおした。そうか、この人は本気なんやな。Hさんがすわりこむというなら、一人でさせるわけにはいかぬ。

「わたしもつきあうよ」と云ってしまった。さあ、もうちょっとがんばろうと、残りの家をまわった。

関電の反撃 ③

交流会のあった翌日は、「きのうの交流会はよかったね。いしスライドやったね」というのがあいさつがわりになつていたという。

ところが関電の反撃は、ものすごい早だった。現地駐在の関電立地部は、私たちが今回まわった部落は、もうすでに落ちたと見て、となりの漁協の部落をまわっているということだった。それにいつも土日は大阪に帰って現地にはいはいはすなのに、私たちが行ったその日は、小浦などの部落に立地部の車が止り、ウロチヨロしている姿があった。そして私たちが帰るか否や早速ボス連中に手をまわしたのだらう。

愛郷同志会会長へ10年前は反対派で、阿尾の原奔を追ひ出すのに大いに力があつた人という話だが、そのすぐあと又しふりに御坊の町からひまこつとやってきて阿尾地区の役員をしよう集めたのだという。

「セクトが過激」がわからんのに、よそもんなんかといっしょに一体どうするのか、いびくというときまでは、いっしょとればよいのや」とくぎをさしたということだ。「わしに相談もせんとやつた」と、えらいおこりようで、とるということになつていた。原奔新聞も「そんなもんは読まんでもええ」という鶴の一声。それで阿尾の空気が一変して、もうあんな交流会など、とんでもないという風なことになつたらしい。

ついうかうかと、私たちは日高へ行つてしまつたが、これはもう関電を相手に将棋をさすようなへ勝負なのだ。こちらが一手を指せば、次は相手が指してくる。こちらが指すとき、相手の一手も二手もさきの出方をさんでおかねばならなかつた。当然関電がうごき出すというのを、全く考慮に入れない日高ゆきだった。一とすればたとえ今からではおそくても、次の手をうたねばならぬわけだ。

それはともかくみんなと相談するとして、とりあえず現地で知り合つたおぼさんに大急ぎで手紙をかいた。

手紙 ④

「帰りの汽車でみんなと話をしながら、天王寺まで帰ったのですが、その時の話の中で、とても大切なことを話してくるのを忘れたということに気づいて心配が残っていました。」

というの、

これは全国反原発連絡会議のときに出た話なのですが、電力会社が、現地に対して工作するやり方はどこでも同じで、各地でやって効果のある方法をみつけ出して、それをまとめて、教科書みたいなものにしてそれを適用するそうです。

そのお一条に

まず、反対でも賛成でもない中立風の有力者をださこんで「地元の問題は地元だけでやろう。よき者は入れるな」とその人に云わせることとということがあるそうです。

そのことについて、柏崎や伊方や女川でのいろんなことがあるそうです。このことについての意見は「よき者の最大のもは都会に本社を持つ電力会社ではないか。現地の人間―親せきや親子兄弟を二つに分断しカタキ同士のように対立させる原因をすでに持込んでいるのはよきものの電力会社ではないか」ということです。だから電力会社に対してよきものが出ていけというならともかく、いっしょに反対しようと思ってきた人を、よきものということで追い出せというのは、電力会社だけがよきこぶやり方は、賛成派が電力会社の口車にのった云々ではないか」

「ともかく、どんなエライ人の云うことでも、そのことがほんとうに反対に役立つかどうか考えるにはまず、そのことで、電力会社でよきこぶかいやがるか

で判断することが大切だ。電力会社の巧妙ないろんな策動や、いかにも本当らしい口車にだまされてはだめだ」ということです。

こんなことを書くのは、今日戸さんがたまたま電話した時、愛郷同志会が早速あつまって、その席上で、「どここの馬の骨とモウからめアカや過激派のよき者など入れていっしょに反対運動をやるのは困る」というようなことがいわれたということをお聞きしました。

このことで、地元の人には動搖されているんじゃないかと思えます。

私たちは、いくら誰から悪口をいわれてもかまいませんが、そんな電力会社のわかりきった策略にのるようなことになって、せっかく交流会で阿尾の女の人たちと仲良くなれそうだと喜んでいたので、と、心配ですし、残念です。

私たちは裸のつきあひをしていきたいと思っております。どうかあなた自身を目で私たちを見て、一部の人がいっしょなものであるがどうかたしかめていただきたいのです。

ほんとうに原発が建ったらイヤだというおもしろいあって私は阿尾へ出かけました。それ以外何もありません。

何か困ったことが起ったら、連絡を下さい。いっしょに考えたいと思えます。……」

私の非暴力直接行動論

金沢の読書会で思ったこと

金沢にはもうこれであらう度目、いつも大たのしみで出かける。そのたのしみの中味というのは、実は、何といっても、エさん宅で「ごちそうが食べられる。それからその端在中、ゆっくりのんびり日さんエさんとおしゃべりをして、いつもとまるっきり反対の、いやわらかく、こくのある雰囲気と時間がたのしめる。金沢が、またおつとりしていいのだ。

で、8日「七尾火電の集会」、9日「暴力論ノート読書会」というさそいに、喜びいさんでMさんとお出かけにわけである。

さて、その読書会。何しろ暑くて頭ぼんやり、ほとんど聞いたことを忘れてしまったので、何となくその場で考えていたことを報告代りに書く。

……私はこの頃、よく兄や、弟となくり合ひのケンカをした。どっちとやっても私の方が母からしかられた。「どんなに相手が悪くても、殴ぐり返したら相手と同じレベルに落ちる」と耳にたこができるくらい母は云った。私がベトナム反戦運動に加わったとき、それが知らず知らずのうちに影さようしていたものとみえて、この十年固つきあってきたのは非暴力を標榜するグループばかりだった。といて「非暴力」を論理的につきつめてそれを考えていたわけではない。た

だ情緒的、気分的に、まわりの「バ棒や、投石や警官にあげける」声を、横目でみて「ダメだなあ」と思っていたわけだ。もちろん具体的にはどんな対応をしてよいかははっきりしなかった。だから「非暴力」とは何だろう。「非暴力」で運動するということとはどういうことだろうと、ときどき悩むという程度が「私の非暴力」の内容だった。

この読書会に欠席するからとHさんが出したレジメにも、「ビラまきは直接行動といえるのだろうか：ようするに直接行動とはおのれの身をさらすことではないだろうか」とか：真剣な問が書かれていた。

それを読みながら、「そうだ、この頃は非暴力直接行動とは何かなどと悩まなくなってるなあ」と気づいた。

たとえば、デモをやっていて、ギ動隊がおそってくる。友人が殴られる。そのとき私はどうするかなんて前みたいに悩んだりしない。それはその時、やられたらやりかえそうとするのはあたりまえのことだ。

とにかく、今自分は「非暴力直接行動」でいくんだということだけははっきり肝に落ち着いている。このことさえは、きり自慢できさえすれば、あとは楽なもの。ひとつも気にならない。

そこで、暴力論ノートのうけうりするところ

人類の歴史が始まって以来、人々のくらしは全て、非暴力直接行動そのものであった。自分自身の必要なものは自分自身で創っていた。小グループをつくって互いに助けあひながら道具をつくり、田をたがやし、食物を収獲し、絵もかいた。うたったり踊った。そのことがまさに直接行動だった。そして、人々の日常、直接行動を保障するのが非暴力状況なのである。殴りあいなどしながらでは田んぼは耕せない。

いまの世の中は一見平和な非暴力的な状況のようにみえるけれども、そのすべては、すみからすみまで国家のわく、国家の暴力装置にとりこまれ、人々もそれなしには暮していけないがごとく思いこんでしまっている。いつわりのみせかけの疑似非暴力状況だ。これをなんとか、私にち自身の手で、私にち自身のためのものにとりもどさなければいけない。

私は、すべての行為は、それを意識するかぎり、非暴力直接行動をとりもどすための行動であると思つてゐる。

ただひとつ、じらまきにしても、デモにしても、集りにしても、そのひとつひとつの中に、やるたびに私たち自身のほんのちよっぴり、つめの先ほどまでの創意と工夫をつくわえなければならぬ。そのひとつひとつの行動そのものが目的であり過程であるのだ。それがへ直接行動への尊厳である。

そりやお実ワイ、今まで、どこにもない新しいやり

方で運動を創りだしていくんだから困難なことだが、人民の歴史は、これ以外にありえないのだし、そのことをはっきりと自覚することによって、「カ」の第一歩がでてくるのだ。

「I」さんが最後に、「とにかく、私は非暴力直接行動を信じて、それで極楽往生するんやと行って、みんなを突寄せたが、私は「ほんとにそうだ」と思った。

非暴力直接行動は、暴力か非暴力かなどという選別の問題ではない。もつこれより以外に道はない。それゆえの「ただ非暴力直接行動」なのだ。

風、

車務所から

① ふう君がふうふうなつてレボニフをかいた。おんど感思定つて下さると、今度もはりきるでしよう。日商レボは別の筆者がへつ仰草通信（いま作中）にもかいています。あわせて、全容をつかんで下さい。

② 3 頁下段に広告しましたが冊子へ非暴力訓練と付向かへ限定発行 100 部。すでに大好評！うりきれぬうちに申込みを！

③ 夏休みでウリ事務所訪問の方は予告を！電話は 06-100-1000 です。もう 15 日まで毎日予定がつまっています。誰かがいます。尚 16 日、20 日は事務所のバカンス。緊急以外、用件お控下さい。

④ 只今や、深刻な金欠病、ちよつと行動しすぎ？